



北海道における農村ツーリズム （農たび・北海道）の推進について

北海道では（以下道）、都市と農村との交流を促進することを目的に、平成29年度から、農業者だけでなく、宿泊業や飲食業など、地域の多様な主体が地域ぐるみで教育旅行や農泊に取り組む農村ツーリズム（愛称：農たび・北海道）を推進しています（図1）。この取組は旅行者が農村地域に滞在し、農作業体験や受入農業者と交流するとともに、豊かな自然や食の魅力に触れることにより、農業や農村に対する理解が進み、滞在後も引き続き、その地域に関心を持ち、地域の農産物を継続的に購入するなど、将来の関係人口の拡大を目的としています（図2）。



図1 地域ぐるみの受入のイメージ図



図2 農村ツーリズムの期待される効果

また、多様な主体が地域ぐるみで農村ツーリズムに取り組むことで、受入農業者等が、自らの住む地域や仕事の魅力を再発見する機会となるほか、地域全体の所得向上や雇用拡大、移住や新規就農にも繋がること

北海道農政部農村振興局農村設計課

が期待されます。

道が実施した調査では、令和元年度に農作業体験を行った人数は約3万8千人でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年度は約1万5千人、令和3年度は約1万6千人と大きく減少しました（図3）。旅行需要が落ち込んだことから、意欲低下による受入農業者等の減少が課題となっています。

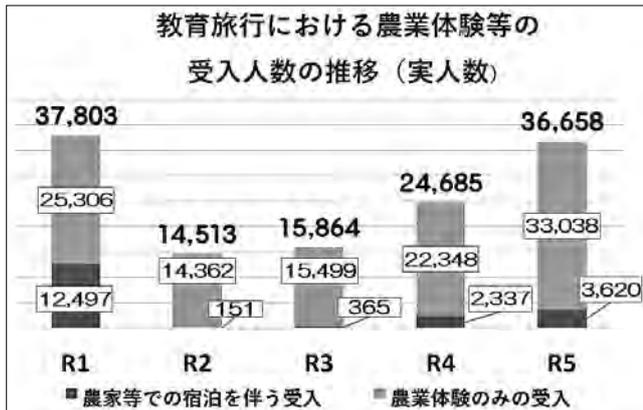


図3 教育旅行における農業体験等の受入人数の推移

<教育旅行受入の推進に係るセミナーで、約310名が参加>

道では、昨年度、農業者などの受入意欲向上を図るとともに、地域ぐるみの体制づくりを促進するため、「教育旅行受入推進セミナー」を企画しました。

令和5年8～9月には、これまで受入が少ない道北地域の名寄市（上川管内）、羽幌町（留萌管内）、豊富町、浜頓別町（宗谷管内）の4会場（対面式）で、また、10月には、道東地域の芽室町（十勝管内）の会場（対面式+オンライン）で開催し、計約310名の農業者、農協、漁協、商工会、観光協会、自治体職員らが参加しました（写真1）。



写真1 受入推進セミナーの会場の様子

本セミナーでは、関係機関や都市と農村を結ぶ地域コーディネート団体から、地域ぐるみによる受入の実施方法や広域連携による事例紹介などのほか、教育旅行生を実際に受入れた農業者から、受入のやりがいについてお話いただきました。

参加者からは、「前から興味はあったが様々な立場の実践者から、受入の具体的な話を聞き、挑戦してみたい」「農村の素晴らしさを伝えるためにも、農家民泊を再び実践したい」などの感想がありました。

<道北地域で実現した4年ぶりの受入>

セミナー終了後の令和5年12月には、4年ぶりに静岡県の高校生81名が教育旅行で道北地域を訪れました。道主催の教育旅行受入推進セミナーの参加がきっかけで初めて受入をした農業者をはじめ、上川管内・留萌管内・宗谷管内の複数市町村の広域で、計22軒の農業者や漁業者、関係機関が連携し、民泊による受入を行いました（写真2）。

農漁家民泊を通じた作業体験や農漁業者との交流は高校生たちにとって貴重な経験となったはずです。



写真2 4年ぶりに実現した道北地域での教育旅行

<農泊推進に係るネットワーク会議を活用し、連携強化>

道では、すでに農村ツーリズムに取り組む地域や関係機関が連携を強化するため、情報交換を行うことを目的として、令和3年度に「北海道農泊推進ネットワーク会議」を設置（図4）しました。現在、農泊地域46団体を含む65団体・企業が加入し、毎年、同会議や研修会を開催しています。



図4 北海道農泊推進ネットワーク会議の構成員

令和6年7月26日（金）に「北海道農泊推進ネットワーク会議」を札幌市内の会場とオンラインを併用して開催し、ネットワーク会員の約120名が参加しました（写真3）。



写真3 ネットワーク会議を活用した連携強化のための情報提供や共有

本年で4回目の開催となる本会議では、令和5年5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行され、今後、インバウンド需要の増加が見込まれることから、農泊インバウンドに関する分野に精通し、活躍されている秋田県仙北市観光文化スポーツ部 田口聡美氏が講師となり、「持続可能な農泊地域づくり～仙北市の農泊インバウンドの取組～」と題し、台湾教育旅行誘致を行ったことをきっかけに、仙北市の農泊事業者が異文化への理解促進と受入の自信に繋がったことから、良い意味で受入の競い合いが生まれ、それが、仙北市の各農泊事業者がレベルアップをしていく礎となったことなどについてお話いただきました。

講演後に、農林水産省から農泊をめぐる状況や農泊推進に活用できる交付金事業の概要、全国農協観光協会から農泊実務者に対する様々なセミナーの情報提供がありました。

このほか、令和6年度に北海道農泊推進ネットワーク会議の新会員となった「陸の孤島」浜益農泊推進協議会（石狩市）からは、国の農泊事業に係る交付金を活用した農泊事業実施計画の取組事例紹介、道農政部からは農村ツーリズムの推進、道と札幌大谷大学との連携事業による農村ツーリズムPRの取組について、情報提供しました。

会議終了後、参加者からは、「秋田県の先進地事例の講演を聞き、今まで、インバウンドの受入体制が十分に整ってから受入れるべきと考えていたが、いち早く受入を試みて実践を積み重ねながら体制を構築していくことが大切だと感じた」「自分たちが魅力的だと思うものではなく相手が望むものを提供してることが大切という講師の話は印象的で、今後、インバウンドの受入を実践し受入拡大を目指したい」と意欲を見せていました。

<札幌大谷大学芸術学部と連携し、農泊PRポスター制作>

平成29年度に道と札幌大谷大学が連携し、農村ツーリズムの愛称「農たび・北海道」のロゴマークを作成（図5）したことをきっかけに、平成30年度から同大学と農村ツーリズム連携事業を実施しています。

連携事業の取組の一環として、道では、令和6年6月1日に農村ツーリズム現地講座を石狩市の農泊地域（いしかり古民家活用地域活性化協議会）で開催し、同大学の芸術学部グラフィック・イラスト専攻の学生20名が農泊の3つの柱「体験・食・宿泊」について学びました。

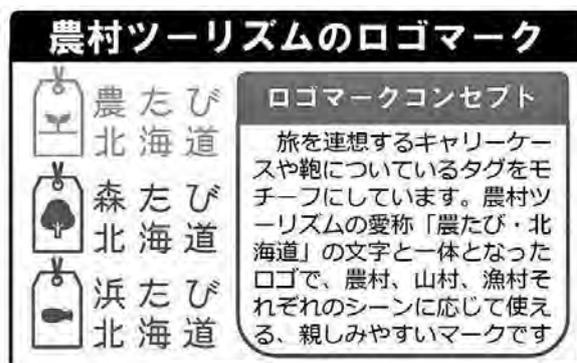


図5 農村ツーリズムロゴマーク

増田農園の増田崇紘代表から、「観光客と交流し農産物の美味しさを直接伝えられる」農作業体験の魅力について話を聞き、その後、田植え体験をしました。

田植えが初めての学生も多く、裸足になって田んぼへ入り、丁寧に苗を植え、田植えを楽しみました（写真4）。



写真4 田植え体験

昼食は、同市内の飲食店「おかずの駅ほっ」がつくった、地場産食材を使った「石狩おもてなしイタリアン弁当」（写真5）を食べながら、立浪ゆかり代表から、「食」の魅力や美味しさの話に耳を傾けました。その後、学生たちは、築100年の古民家を農泊施設とし再生させた「古民家の宿Solii」（写真6）を訪れ、開業に関わった北海道古民家再生協会の江崎幹夫理事長から、「宿」



写真5 石狩おもてなしイタリアン弁当



写真6 古民家の宿Solii

の魅力や、農村地域に観光客を受入れるために体験・食・宿泊の3分野の仲間を集めて農泊地域の魅力づくりを行う取組についての話を聞きました。

今後、参加した学生たちは、現地講座で知って、体験して、見て、味わって、受入者と交流したことを踏まえて、約50カ所の「北海道農泊体験情報HP」の2次元コード（図6）を掲載した「北海道の農泊体験に行きたくなるPRポスター」を制作し、11月開催予定の農たび・北海道ネットワーク研修会で制作した作品を発表します。発表した作品の中から、最優秀作品を選定し、選ばれた最優秀作品は道外の北海道どさんこプラザ店などに展示して、都市部に住む方々に北海道農泊体験の魅力を発信し、都市と農村の交流を促進します。



図6 「北海道農泊体験情報HP」の2次元コード

＜今後の取組について＞

道としては、今後、インバウンドを含めたさらなる旅行者の増加を見据え、ネットワーク会議を活用した連携強化のための情報提供や共有、地域ぐるみで受入を行う際に役割分担を行うコーディネーターなどの人材の育成・確保、受入実践者・地域の拡大に向けた受入体制づくりを支援し、本道の農村地域の活性化が図られるよう取り組んでいきます。

また、道が主催する農村ツーリズムのセミナーや研修会、取組事例などについて、農たび・北海道SNSのFacebook（図7）とX（旧Twitter）（図8）で情報を発信していますので、ぜひ、フォローをお願いします！



図7 Facebook/バナー



図8 X/バナー